様　式　Ｃ－４１

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４３０２
研究種目：奨励研究
研究期間：2021～2021
課題番号：２１Ｈ０３８６４

研究課題名　　異文化接触場面での批判的思考育成のためのwithコロナの新協働学習モデルの構築

研究代表者
佐古　孝義（Sako, Takayoshi）

京都教育大学・附属高等学校・高等学校教諭（英語科）

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　370,000円

研究成果の概要：外国語学習による生徒のアイデンティティ意識の複層化に寄与するために，コロナ禍の時代におけるCTの育成を促進する「新しい協働学習」の指導モデルを構築する，という研究目標に対し，COVID防止のガイドラインを守りつつ、より他者性を生徒が感じられるような協働作業ができるような指導上の工夫を行った。様々な協働学習の場面で，他者の意見を知ることができ，交流が深まるという効果を，多くの生徒は肯定的に感じ，授業が改善されたと評価した（生徒全体の約70%が「良くなった・とても良くなった」と回答）。学び合う仲間がそばにいる安心感と，英語力や批判的思考に挑戦するディベート活動に価値を見出したということがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
コロナ禍での教育現場におけるさまざまな制約の中で，いわゆる通常の意味における「異文化体験」は大幅に制限されたが，そもそも教室現場は自分とは異なる考え方や価値観，社会的背景を持った「異文化の存在」である他の生徒（や教員）たちとどのような関係を切り結んでゆくかを学ぶ場であり，そうした意味での異文化接触をどのように批判的思考及び態度の伸長に繋げてゆくかが課題であると認識した。積極的に関与してくるわけではないが，「ただ他者が身近にいる」と感じられることが，学び（特に批判的思考力）にどのような積極的な意味があるかを，本研究では一定程度明らかにすることができた点で，社会定義を果たせたと考える。

研究分野：英語教育

キーワード：クリティカル・シンキング　協働学習　異文化間能力

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究の目的

本研究での目標は，異なる考え方を持つ他者との接触の場面における**高校生のアイデンティティの変容と複層化が，批判的思考及び態度の伸長に影響を受ける**との仮説を立て，授業実践によって検証を行い，結果を再び実践に還元することであった。そのために，

① アイデンティティ変容と複層化を促す中心的構成要素として**批判的思考力** critical thinking(CT)を措定する。

② 外国語学習による生徒のアイデンティティ意識の複層化に寄与するために，コロナ禍の時代における CT の育成を促進する「**新しい協働学習」の指導モデル**を構築する。

本研究の意義は，異文化との接触が益々増加する現代において，異文化接触場面での批判的思考を促す教育実践の先進事例として，様々な教育現場への転用可能性を持つ点にある。

２．研究成果

（1）研究　その１

①リサーチ・クエスチョン(1)

2020 年から生じている COVID-19 パンデミックによって，教室現場で極端な制約が生じ，いわゆる純然たる「異文化」との接触の機会が大幅に減じられた。今まで我々が当たり前と考えてきた活動の多くが制限された極めて特殊で制限された状態で授業を行うことを余儀なくされたことが，他者との接触を失った生徒の学びにどのような影響を与えたのかをまずは反省し分析することから研究を開始した。「コロナ禍で，他者との協働作業が大幅に制限された 2020 年度の授業を，生徒たちはどのように評価したのか」をリサーチ・クエスチョン(1)と設定した。

②調査対象者

2020 年度１年生（在籍 40 人×２クラス　有効回答数 n=68）

③調査方法

2020 年度末（3 月　学年末考査後）に，この１年間の授業の感想を A4 用紙に自由に記述させた。分析には，KH コーダー(樋口，2014)を使用した。回答には男女，2020 年度の成績（年度末の 5 段階評定）の項目を加えて分析を行なった。

④結果と考察

成績上位層は，日々の小テスト（で合格点が取れないこと）への心配がなく，むしろ授業以外の英語学習に関心の中心が移っていることを示唆している。特に読み書きに一定の自信のある生徒ほど，この傾向が強い。

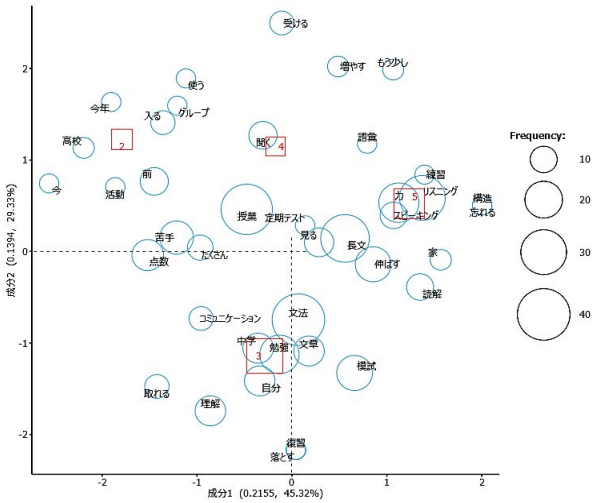


図１　対応分析結果（成績層別）

下位層の生徒たちは特に，自分の学習の意味を自ら決定することが難しく，「誰かと意見を交換したり，誰かに向けて発表したりする」という協働学習の機会がないと学びへの動機付けがなされないということが，本調査の結果より示唆されている。（統計的には，この結果には男女差は認められなかった。）

【グループ 1】音声中心活動（紫）
【グループ 2】大きなテスト（緑）
【グループ 3】日々の小テスト（青）
【グループ 4】書くことに関する記述が非常に少ない（赤）

テストや知識のインプットに関心が向かい，他者性と共同性に対する関心が失われていたというのは，簡単に言えば，学びが「**閉じた**」ものになってしまった，ということがわかった。

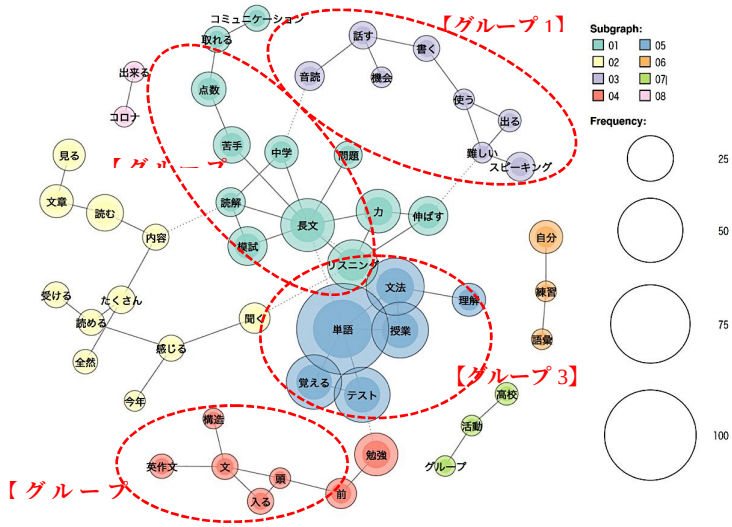


図２　共起ネットワーク

（2）研究　その 2

①研究目的

2021 年度は、COVID 防止のガイドラインを守りつつ、より他者性を生徒が感じられるような仕掛け，つまり共同作業ができるような指導上の工夫を行い，「2020 年度の反省を受けて協働学習を取り入れた 2021 年度の授業を，これまで生徒はどう評価しているか？」をリサーチ・クエスチョン(2)と設定した。

②調査対象者

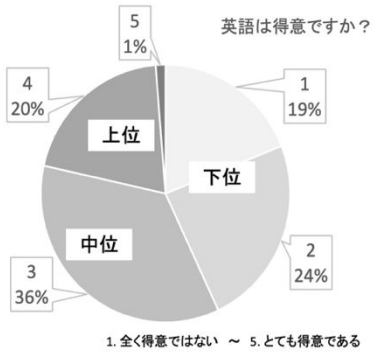
2021 年度 2 年生（40 人×2 クラス　n=79）

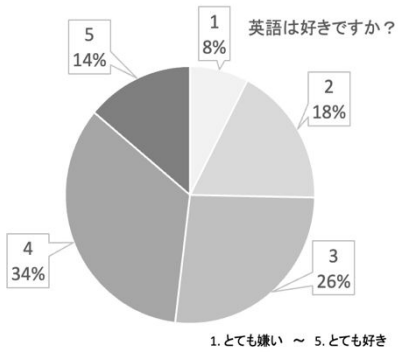
③調査方法

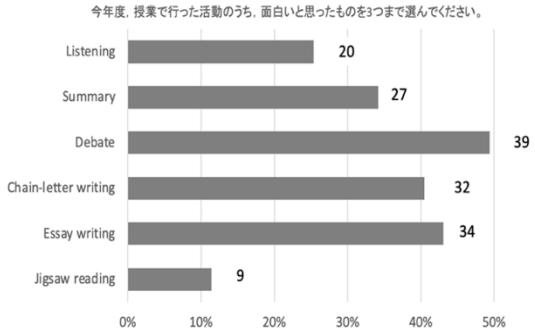
学期の最終授業で，生徒は Google form を通じて回答。

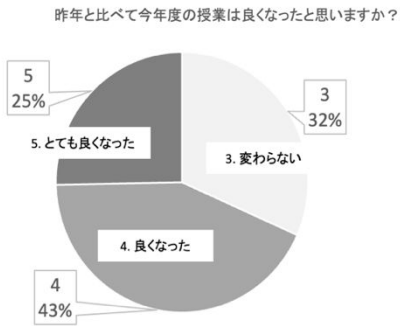
④結果と考察

様々な協働学習の場面で，他者の意見を知ることができ，交流が深まるという効果を，多くの生徒は肯定的に感じ，授業が改善されたと評価した（生徒全体の約 70%が「良くなった・とても良くなった」と回答)。ともに学び合う仲間がそばにいることによる安心感と英語力や批判的思考に挑戦するディベート活動に価値を見出したということがわかった。









⑤研究結果の学術的・社会的意義

コロナ禍での教育現場におけるさまざまな制約の中で，いわゆる通常の意味における「異文化体験」は大幅に制限されたが，そもそも教室現場は自分とは異なる考え方や価値観，社会的背景を持った「異文化の存在」である他の生徒（や教員）たちとどのような関係を切り結んでゆくかを学ぶ場であり，そうした意味での異文化接触をどのように批判的思考及び態度の伸長に繋げてゆくかが課題であると認識した。そうした他者性を感じ，そこから学ぶ上で，鍵となったのは〈共同性〉という概念である。積極的に関与してくるわけではないが，「ただ他者が身近にいる」と感じられることが，学び（特に批判的思考力）にどのような積極的な意味があるかを，本研究では一定程度明らかにすることができた点で，社会定義を果たせたものであると考える。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名